

児島 三郎* 船木 章悦* 沢部 光一*
高桑 克子*

脳卒中死亡率は同一地方の小地区間でも差を示すことが知られている。この小地区間における脳卒中死亡率の差は、地区の生活環境とくに食生活ならびに農業経営状況とそれぞれ関連しあっていると考えられる。そこで、秋田県下各地における循環器疾患死亡率の過去より現在にわたる動きと、各地の食生活の変遷、農家経営状況の

A 調査地区

	町 村 名	性	昭和 30 年	昭和 35 年	昭和 40 年	昭和 45 年
平 地 農 村	十平 文 大 鹿 物 雄 字 川 町 町 村	男	11,002	12,166	12,979	13,525
		女	12,045	13,570	14,623	15,381
		計	23,047	25,736	27,602	28,906
農 山 村	河 辺 町 東 由 利 村 由 利 町	男	5,784	6,276	6,543	6,543
		女	6,486	7,103	7,602	7,762
		計	12,270	13,379	14,145	14,305
山 村	山 内 村 鳥 海 村	男	3,657	3,779	3,913	3,912
		女	3,825	4,125	4,332	4,434
		計	7,482	7,904	8,245	8,346

農家経営状況は、昭和30年、35年、40年、45年に行なわれた農林業センサスの成績の中から、農家1戸当りの農家世帯人員、出稼者、米の収穫量および専業農家率の推移をとりあげて観察した。

— 85 —

Ⅲ 成 績

A 脳卒中死亡率

平地農村，農山村，山村における脳卒中死亡率の推移は図1，2に示した通りである。

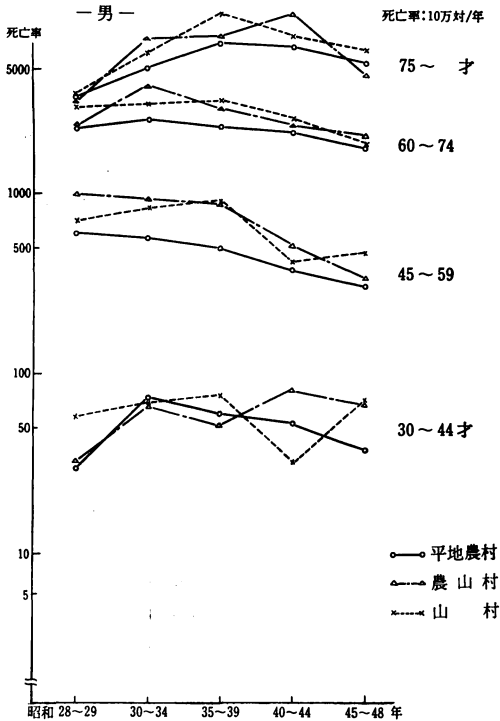


図1 脳卒中死亡率の推移

男子についてみると、30~74才までの各年令層の脳卒中死亡率は各年次区分を通じ、平地農村が農山村，山村より低率を示した。そして、30~44才代では、農山村，山村の脳卒中死亡率はわずかな増加傾向または不変に推移しているのにたいし、平地農村では昭和30~34年を境にして減少を示している。45~59才代，60~74才代では、平地農村の死亡率は昭和28~29年の観察当初より3地区のうちもっとも低率であり、年次推移にともないさらに減少を続けている。農山村，山村では昭和35~39年以後減少傾向を示しているが、昭和45~48年の時点でもなお平地農村より高率である。60~74才代では、45~59才代に比べ3地区とも年次推移にともなう死亡率の減少の度合いが小さい。75才以上では、3地区とも昭和28~29年に比べ昭和45~48年の死亡率は高率を示している。そしてこの年令層では3地区間で死亡率の差がみられない。

女子では、30~74才代までの脳卒中死亡率はやはり平地農村が農山村，山村に比べ低率である。30~44才代で

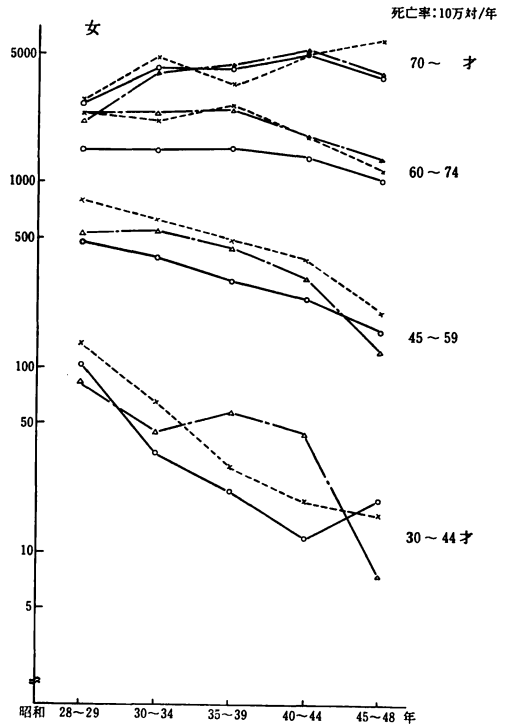


図2 脳卒中死亡率の推移

は、高率であった農山村，山村の死亡率も減少の経過をたどり、昭和45~48年になって3地区間で差を示さなくなった。45~59才代では3地区とも死亡率の減少がみられるが、山村の死亡率は各年次区分を通じ3地区のうち常に最高である。60~74才代では、死亡率は昭和35~39年代を境に3地区とも減少を続けているが、なかでも、平地農村の死亡率がもっとも低率である。75才以上の死亡率は3地区とも増加しており、3地区間で明らかな差を示さない。

B 虚血性心疾患死亡率

図3，4より3地区の虚血性心疾患死亡率は脳卒中死亡率に比べ明らかに低率である。

男子では、各年令層の死亡率はほぼ不変で推移している。3地区間の比較では、45~74才の年令層で山村の死亡率が他の2地区より低い傾向を示している。その他の年令層では3地区間に明らかな差がみられない。

女子では、3地区の死亡率は各年令層とも地区間での差は明らかでない。そして、年次の推移にともなう変化も一定の傾向を示さない。

以上、平地農村，農山村，山村における脳卒中死亡率は74才以下では平地農村が以前よりもっとも低率であり、さらに減少を続ける傾向を示している。これにたいし、農山村，山村の死亡率は高率であり、近年減少傾向を示しているが、なお、平地農村より高率である。そし

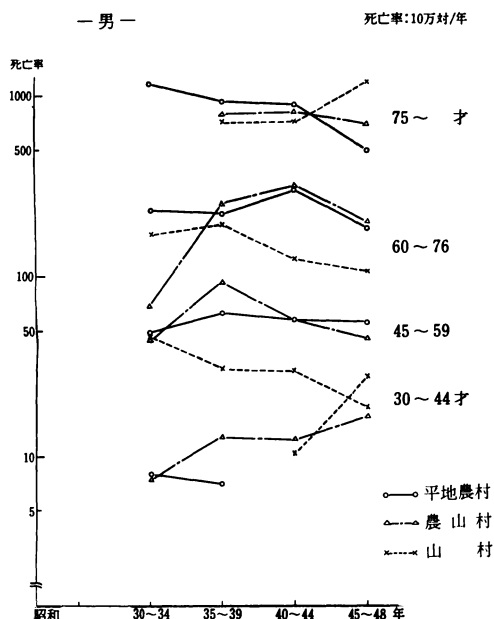


図3 虚血性心疾患死亡率の推移

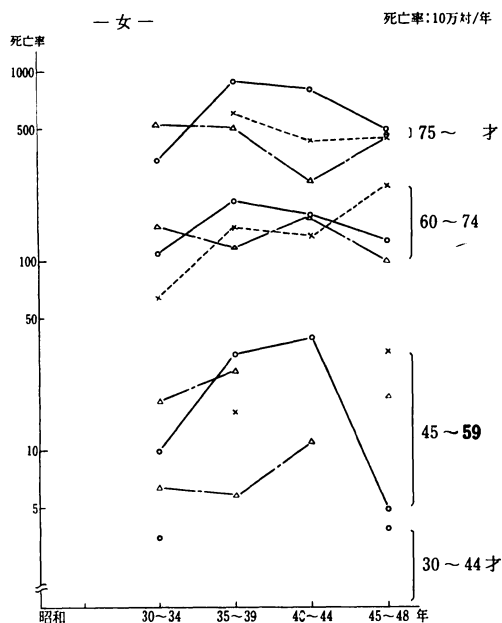


図4 虚血性心疾患死亡率の推移

とくに、男子の30~44才代の農山村、山村における死亡率の動向、および、45~59才代の山村の死亡率の動向は警戒しなければならない。

虚血性心疾患死亡率は3地区とも脳卒中死亡率に比べ明らかに低率のまま推移している。そして、3地区間で明らかな差がみられない。

C 栄養調査成績

3地区の栄養摂取量の推移を図5に示した。図より、

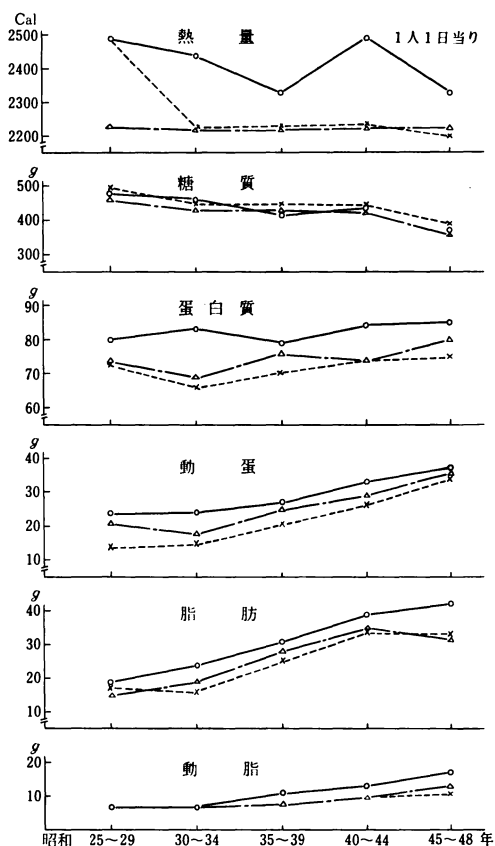


図5 栄養摂取量の推移

熱量は平地農村が農山村、山村より高い傾向を示している。糖質の摂取量は3地区間で差がみられず、3地区とも減少傾向を示している。動物性蛋白、脂肪および動物性脂肪の摂取量は平地農村がもっとも多く、さらに、摂取量の増加がつづいている。これにたいし、摂取量は農山村、山村の順に少ない。年次推移にともないこの両地区も摂取量の増加がみられるが、なお、農山村、山村の摂取量は平地農村に及ばない。

食品群別摂取量の推移は図6、7に示した。図より、米の摂取量は3地区とも減少しつつある。山村の米摂取量は昭和25~29年当時より現在まで3地区のうち常にもっとも多いまま経過している。そして、みその摂取量は山村ではほとんど変化しないまま推移している。一方、平地農村ではみその摂取量の減少傾向が3地区のうちもっとも顕著である。魚介類の摂取量は平地農村では昭和25~29年当時より高い摂取量のまま推移している。農山村、山村では昭和25~34年当時は摂取量が平地農村より低かったが、その後、摂取量は急速に増加してきた。肉の摂取量は3地区とも増加を示しているが、平地農村における摂取量の増加がとくに顕著である。卵の摂取量は3地区とも増加がみられ、近年では、3地区の摂取量に

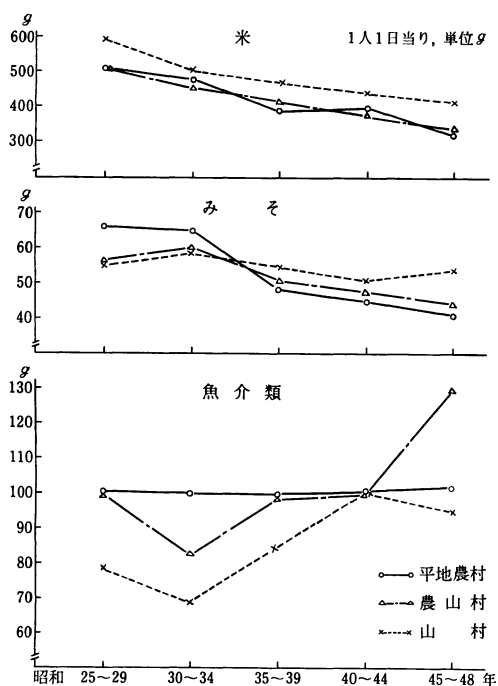


図6 食品群別摂取量の推移

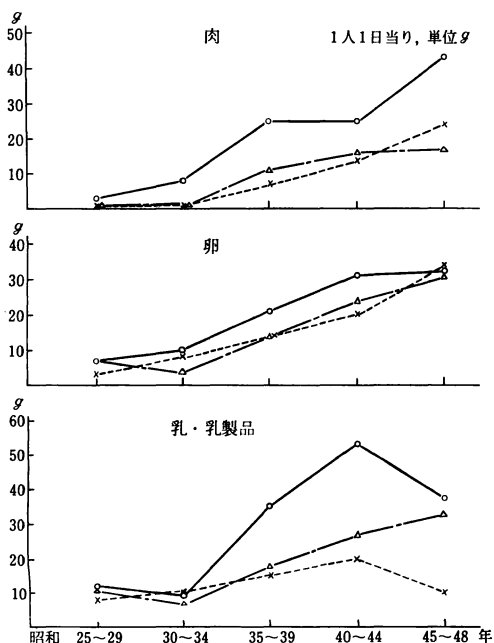


図7 食品群別摂取量の推移

差がみられない。乳、乳製品の摂取量は平地農村でもっとも増加がみられる。ついで、農山村が増加を示している。山村では摂取量の増加はごく少なく、近年でも摂取量は3地区のなかでもっとも少ない。

以上の成績より、平地農村では、米、みそを中心とし

た東北農村の食生活の原形が、3地区のうちもっとも変化しつつあることがうかがわれる。そして、肉、乳類の摂取量が増加する食生活への転換が進行しはじめたと推測される。これにたいし、山村ではいまなお農村の食生活の原形が保持されており、その改善がもっとも遅い。そして、農山村では両地区の中間の動きを示していると観察される。

D 農業の変遷

米作単作地帯における農家経済の基盤は米の収穫量によって規定される。

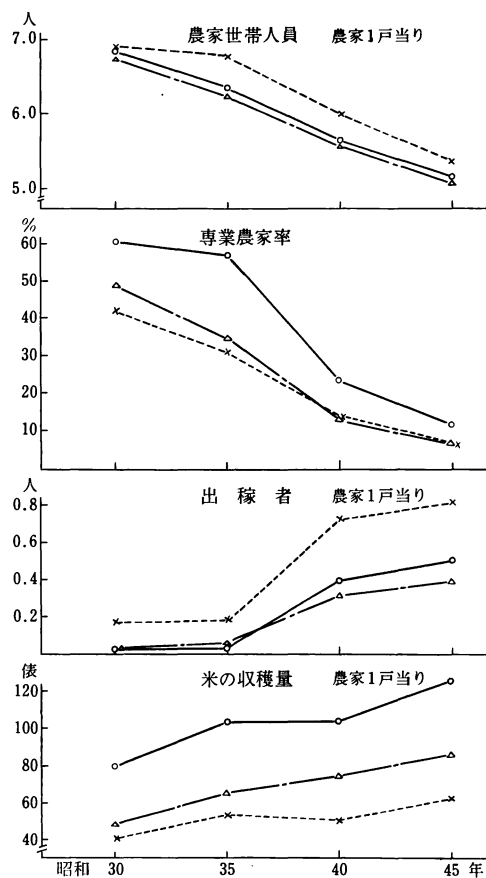


図8 農業の変遷

図8より、米の収穫量が少なく、農家世帯人員の多い山村では、当然、農外所得への依存度が高まると考えられる。そしてこれは、農家の兼業化率を高め、労働市場が近くにない山村地区では出稼者の増加という形態であられる。このような状態は経済変動をまともに受けやすいと考える。

一方、平地農村では、米の収穫量が多く、農家世帯人員も比較的少ないことより、経済基盤は山村よりはるかに安定していると考える。近年、出稼者が増加してい

るが、その内容は山村と異なり短期間の者が多い。農山村の農業は両地区のほぼ中間の状態で推移している。

IV 考 察

3地区の脳卒中死亡率の推移、食生活、農業の変遷をあわせて考察する。

農家の経済基盤がもっとも安定している平地農村では、以前より食生活のレベルが高く、肉、乳類の摂取量が増加する食生活への転換が逐次進行している。これを背景として、脳卒中死亡率は以前より3地区のうちで一番低率であり、さらに、74才以下の各年令層で死亡率の

減少が男、女とも観察される。

農家の経済基盤が平地農村より劣る農山村では、食生活の改善は平地農村に及ばない。このような地区の脳卒中死亡率は、平地農村より高率である。農業労働、農外労働をもっとも受け持つ男子の30～44才代では、脳卒中死亡が減少を示さない。

零細な山村では、食生活はいまなお農村の食生活の原形が保持されており、その改善が遅い。そして、脳卒中死亡率は高率である。とくに、男子の死亡率が30～44才代で減少を示さず、45～59才代でも減少傾向が3地区のうちでもっとも少なく、なお、高率を示している。